

2021年1月30日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
修士論文

ドメスティック・バイオレンスと授乳・育児行動との関連性の探索

Exploratory research of the associations between
intimate partner violence, breastfeeding, and child rearing practice

学籍番号 19MW011

氏名 村本 はるか

要旨

1. 背景

日本では、妊娠中にドメスティック・バイオレンス（DV）を受けている女性は少なくとも5%おり、母子の心身に長期的かつ深刻な影響を与えると報告されている。しかし、DV被害と母乳育児・医療アクセス・社会資源の利用などの具体的な育児行動についての関連性に関する研究は少なく、DV被害を受けながら育児をする母親の日常体験を捉えた調査はない。

2. 目的

本研究の目的は、1歳児を持つ母親を対象に、産後DV被害と母親の具体的な育児行動の関係性を探索的に明らかにすることである。

3. 方法

研究デザインは、横断研究である。2020年6月5日から9月30日の間、便宜的算出法により標本抽出を行い、無記名自己記入式質問紙調査を実施した。データ収集は、①Webモニターパネル調査②子育て支援施設でのポスター掲示の方法を併用した。測定用具は、独立変数として、日本語版ISAを使用し、従属変数は、「母乳育児の頻度・母乳育児の期間」「育児サービス・ソーシャルサービスの利用」「乳幼児健康診査・新生児訪問の利用」「医療サービスの利用・予防接種状況」「母子での外出」の5つの構成概念が含まれた。調整変数を、母親の年齢、最終学歴、就業状況、初経産婦、児の性別、世帯年収とし、DVの有無を独立変数とした多重ロジスティック回帰分析を実施した。

3. 結果

対象の母親266名のうち、DV陽性者は57名(21.4%)であった。DV陽性の母親は、産後6か月時点で母乳をあげている（混合栄養を含む）と回答した者が有意に少なかった（AOR:0.28, 95%CI:0.13-0.62）。また、DV陽性の母親の子どもは、0歳児に推奨されている予防接種を未接種である者が多く、ヒブ（AOR:0.18, 95%CI:0.10-0.46）、BCG（AOR:0.10, 95%CI:0.03-0.29）、B型肝炎（AOR:0.34, 95%CI:0.16-0.70）、ロタ（AOR:0.40, 95%CI:0.20-0.76）の推奨期間内での接種率が有意に低かった。DV陽性の母親は、夫・パートナーから育児サポートを受けたと回答した者が有意に少なく（AOR:0.20, 95%CI:0.08-0.51）、育児のサポートの満足度に対する回答が「十分である」と答えた者も有意に少なかった（AOR:0.34, 95%CI:0.17-0.66）。一方で、DV陽性の母親は、産後ケア事業（AOR:4.63, 95%CI: 2.19-10.10）、産後ヘルパー（AOR:13.40, CI95%: 3.91-45.82）、育児電話相談（AOR:3.23, CI95%: 1.45-7.20）の利用が有意に多かった。子育てイベントの利用率はDV陽性の母親が有意に低かった（AOR:0.32, CI95%: 0.17-0.63）。

4. 結論

DV被害者の母親は、母乳育児率が低く、子どもが予防接種を適正時期に接種していない傾向があった。また、育児サポートの満足度が低かった。DV被害を受けながら子育てする母親への長期的・多面的な育児サポートが重要であることが示唆された。